## 東京会場

# エミシ・エゾ・アイヌ

1　9月6日（水）　19:00～20:30
2　9月7日（木）　19:00～20:30

講　師
福島大学行政社会学部教授　工藤　雅樹

1

## 1　はじめに

只今ご紹介いただきました工藤でございます。私は考古学や歴史学の立場から東北地方の古代蝦夷について研究しております。なお、蝦夷はふつうはエゾと読みますが、平安時代の末近くまではエゾという読みはなく、エミシと読んでおりました。今回の私の話は主に平安時代以前のことになりますので、蝦夷をエミシと発音することにいたします。

## 2　蝦夷アイヌ説と蝦夷日本人説

古代の蝦夷に関しては、古くから蝦夷はアイヌにほかならないという学説（蝦夷アイヌ説）がありました。蝦夷アイヌ説は歴史が古く江戸時代にさかのぼり、新井白石の『蝦夷志』や本居宣長の『古事記伝』にもそのような考えが示されております。また中央の学者だけではなく、北海道や樺太の旅をして旅日記を残した松浦武四郎やアイヌ絵で有名な秦檍麿［ハタアオキマロ］なども蝦夷アイヌ説の立場だったようであります。

これに対して今から70～80年ぐらい前から、蝦夷アイヌ説を批判する形で蝦夷辺民説という考えが出されました。辺民とは辺境の民ということで、蝦夷辺民説とは古代の蝦夷は都から遠く離れたところに住んでおり、それだけに都の人々とは風俗習慣なども違ったところがあったではあろうが、蝦夷は文化的にも血の上でも日本人の枠の中に収まるのだという学説であります。ですから蝦夷辺民説は内容的には蝦夷日本人説と言い換えることができます。

そして蝦夷日本人説と蝦夷アイヌ説の二つの考え方の対立は、現在でも未解決の大きな問題なのであります。ところで私はこの二つの説の対立は、例えば邪馬台国論争のように、もし邪馬台国九州説が正しければ自動的に邪馬台国大和説は誤りということになるような二者択一の発想では解決できないと考えております。

実は私の恩師である伊東信雄先生は蝦夷日本人説の一方の旗頭というような方でありました。そこで当然のことながら、私もはじめは蝦夷日本人説を奉じておりました。ところが今から約20年ちよっと前から、毎年何度となく北海道へ参り、各地の発掘調査の現場を見せていただいたり、資料館、博物館を訪れたりするようになりました。そのきっかけとなったのは、昭和40年代の末近くになって当時私が勤務しておりました宮城県多賀城跡調査研究所が中心となって、多賀城跡に近接したところに東北歴史資料館という、当時としてはやや大きめの博物館を作ることになり、私がその準備を担当することになりまして、何度か新しいタイプの博物館としての先進施設として知られていた札幌の北海道開拓記念館に参りまして博物館作りのノウハウを教えていただきました。そして、昭和54年度からは私の勤務先が仙台市にある宮城学院女子大学になり、学生を引率しての見学旅行の行き先として北海道を選択いたしました。

北悔道の考古資料やアイヌ資料などに接するなかで、蝦夷アイヌ説の根拠のなかにも、現代の研究者の目で見ても否定できない事実がたくさんあるということに気がついたのであります。しかし蝦夷日本人説の根拠のなかにも事実として尊重しなければならない点が多くあることも確かでありまして、それぞれの説のどういう部分が現代の研究レベルからいっても尊重しなければならない点であるかについては、これから具体的に申しあげますが、いずれにいたしましても二つの学説の根拠の中にそれぞれ正しい部分が存在するということに気がついたのであります。

そういうことになりますと、蝦夷アイヌ説と蝦夷日本

人説の対立は、一方の説がマルであれば他方の説はバツであると機械的に考える方向では解決できないのではないかと考えるようになったのであります。これはある意味で私の軌道修正でありましたが、このように考えを少しだけ転換してみたのです。つまり蝦夷日本人説の信者といっても良かった私が、蝦夷日本人説だけにこだわって、蝦夷アイヌ説は見向きもしないという立場ではだめなのだというように軌道修正したわけであります。

私がこのような立場ではじめて書いた論文は1983年に出た「蝦夷アイヌ説と非アイヌ説」」(『宮城の研究』二) であり、その後『古代の蝦夷・北日本縄文人の末裔』(河出書房新社、1992) で一歩考えを進めました。そしてつい先日にこの方向でさらに考えを進めた『古代蝦夷』(吉川弘文館、2000,9,1) を出しました。また近日中にさらに新書版の本が二冊出ることになっております。今回はこれらの本に書いたことのなかのポイントを紹介させていただきたいと思います。

## 3　蝦夷日本人説

蝦夷日本人説は蝦夷アイヌ説にくらべて新しい説で、この説が有力になったのは戦後のことだと考えて差し支えないでありましょう。それだけに蝦夷日本人説は多くの新しいデータを根拠として持っております。そのなかの主な点をご紹介いたします。

蝦夷日本人説の重要な根拠とされたのが、古代蝦夷の本場である東北地方北部に早くから水田稲作が入っていたことが証明されたことであります。先にもお名前が出た伊東信雄先生は昭和28年に岩手県水沢市常盤［トキワ］遺跡において籾の痕がついている弥生土器を発掘され、東北北部にも弥生時代に水田稲作が及んでいたことを実証する第一歩を踏み出されました。そして昭和33年には青森県南津軽郡田舎館［イナカダテ］村垂柳［タレヤナギ］遺跡の調査を行ない、弥生時代に相当する年代の多くの土器を発掘いたしましたが、それらの多くには籾痕がついておりました。また土器が発見されたのと同じ地層から火に焦げて真っ黒くなっている籾の実物が発見されました。この遺跡は津軽平野のまっただなかにあり、私は大学の二年生でありましたが、この調査につれていっていただきました。垂柳遺蹟からは後に青森県教育委員会の方々によって弥生時代に相当する時期の水田の跡が広い範囲にわたって発掘されたのであります。

一般的に稲作文化は日本文化の一つの目安になると考えられることが多く、古代蝦夷の本場ともいえる青森県の津軽平野で二千年以上も前にもう水田稲作が行なわれていたことは、古代の蝦夷は、祖先の時代から水田稲作農業をやっていたのだから、古代蝦夷の文化は日本人の文化であることを意味していると考えられ、それは蝦夷イコール日本人だと考えた方が理解しやすいということになったのであります。ちなみに二千年以上前という年代は、関東地方や静岡県辺りはいうに及ばず、奈良県や福岡県などの西日本で水田稲作農業が始まったのとほとんど年代の開きがないのであります。そしてこんなにも古くから東北北部でも水田稲作農業が行なわれていたことは、蝦夷日本人説にとって大変有利な事実であるということになりました。

次に古墳時代のことでは、岩手県胆沢町に角塚古墳［ツノヅカコフン］という前方後円墳があります。前方後円墳は、その地域の有力な人物を葬った大変規模の大きいお墓でありますが、前方後円墳の一番大きな立派なものは奈良県とか大阪府にあります。ですから前方後円墳は大和朝廷のシンボルというふうに考えてもいいようなものでありますが、それが岩手県にもあるのです。角塚古墳はやや小型ながら立派な前方後円墳であり、埴輪なども発見されております。

胆沢という地名は古代蝦夷に関連する地名としては大変に有名であります。なぜかと申しますと、奈良時代の末から平安時代のはじめにかけて何度も政府軍の大軍が岩手県地方に攻め入りました。そしてついに坂上田村麻呂が率いる軍が盛岡市辺りまで攻め込んで、岩手県地方を中央政府の直轄支配地に組み入れたのです。そしてこの時期の蝦夷側の中心となった勢力は阿弖流為［アテルイ］という族長の指導のもとにあった胆沢地方の蝦夷でありました。

こうして何度もの激戦の末に、最終的に岩手県の盛岡市より南の部分、つまりほぼ北上川の中流の地域が中央政府の直轄支配地に組み込まれることになりました。そしてこの地域を治めるために802年に胆沢城という施設が造られたのであります。これは現在岩手県水沢市にその跡が残っており、考古学的な発掘調査が随分進んで、現地には資料館もありますので、これをご覧になりますと、胆沢城という政府側が設けた城の規模や構造がよくわかります。このように八世紀末・九世紀初頭に、激しい戦いの後にようやく政府側が手中におさめた古代蝦夷の本場に、前方後円墳があり、しかも最近角塚古墳の近くから中半入［ナカハンニュウ］遺跡という古墳と同じ年代の土師器の集落も発見されております。

仙台平野もまた、多賀城のような蝦夷に対するための施設である城柵が作られた地域でありますから、少なくとも奈良時代には蝦夷の世界であったのですが、この地域は弥生時代以来水田稲作が盛んに行なわれており、東北地方最大の前方後円墳で、全長が180メートルもある雷神山［ライジンヤマ］古墳や全長120メートルの遠見塚［トオミヅカ］古墳もあり、一層古くから日本文化的な色合が濃い地域であります。

このように蝦夷日本人説は新しい考古学的な事実を、ふんだんにその根拠として持っております。だから蝦夷日本人説は具体的な根拠があると見なされるのも無理からざるところがありました。先程も申し上げましたが、私が当初、蝦夷日本人説を奉じたのも、単に恩師がその説のリーダーだったからだけではなく、やはり具体的な根拠が納得できたからでもあったのであります。

## 4　蝦夷アイヌ説

一方で蝦夷アイヌ説は、江戸時代以来の歴史のある学説でありますから、江戸時代や明治・大正時代にその根拠とされていたことのなかのいくつかの点は、その後の学問の発達により、現在では意味を失ってしまった部分も少なくありません。その例をあげてみましょう。

かつての蝦夷アイヌ説は石器時代人アイヌ説と車の両輪のような関係にありました。石器時代人アイヌ説では、先住民であるアイヌを、後になって大陸方面から渡ってきた日本人の祖先が追い払ったと考えていました。日本人の祖先が大陸から渡来したとする根拠は天孫降臨［テンソンコウリン］の神話であり、日本人の祖先がアイヌと戦ってこれを退けて北に追った根拠は神武東征［ジンムトウセイ］や日本武尊［ヤマトタケルノミコト］の物語でありました。

天孫降臨の神話とは、天の神様の世界から神様の世界のアルジである太陽神アマテラスの孫神様が地上の支配者としての任務を与えられて地上に降りてくるという話であります。また、神武東征の話とは地上に降りてきた太陽神の孫の神様のさらに孫にあたる神様が、地上を治める適地を求めて東のほうに向かい、ついに大和にたどり着いて初代の天皇として即位するという話であります。神武とは初代の天皇に与えられた中国風の漢字二文字のおくり名であります。神話では初代の天皇になる神様がなぜか直接に大和に降りたたずその二代前に南九州に降臨するので、南九州から大和に拠点を移す話が必要になるのです。そして神話では神武東征の過程で、さまざまな敵との戦いがあります。日本武尊の話は景行天皇という天皇の皇子であるヤマトタケルが、西や東の天皇に従わない勢力と戦う話で、『日本書紀』ではヤマトタケルは東方で蝦夷と戦ったことになっております。

そして蝦夷アイヌ説では日本人に追われたアイヌが北にしりぞく途中の存在が古代の蝦夷だと考えました。したがって古代の蝦夷は石器時代の段階にあり、東北地方では奈良時代・平安時代になっても縄文土器と石器を用いていたとも説かれていました。このような筋書きをもつ蝦夷アイヌ説では喜田貞吉［キタサダキチ］氏の説がもっとも有名であります。

しかし現在では石器時代人は先住民であって、日本人と直接の関係はないと考える人はいないと思いますし、天孫降臨の神話が日本人の祖先が大陸から渡来したことを意味し、神武東征や日本武尊の物語が先住民を駆逐した歴史を語るものと理解する考えも、専門家の間ではあまり支持されなくなっており、東北地方では奈良・平安時代まで縄文土器と石器が用いられていたという考えも否定されております。

しかし蝦夷アイヌ説の論拠のなかには、現代の知識をもってしても否定できず、事実と認めなければならない部分もあるのであります。その上、近年の考古学の研究によってはじめて明らかにされた事実のなかにも、どちらかといえば蝦夷アイヌ説のほうに有利にはたらく点さえあるのです。

まず、直接に考古学に関することを申しあげます。東北地方、とりわけ東北北部と北海道、とくに道南地方の古代文化は縄文時代にさかのぼって強い共通点があります。たとえば最近有名になった青森市三内丸山［サンナイマルヤマ］遺跡から発掘される土器と同じものは、函館市サイベ沢遺跡をはじめとして道南地方からもたくさんに発見されております。これらの土器の形はほとんどが胴の部分に屈曲がない円筒形をしていることから円筒土器と呼ばれており、縄文時代の前期と中期のものであります。道東や道北から発見される同じ時期の土器も、やはり円筒形をしており、模様のつけかたなどに地方的な特徴はありますが、東北北部や道南の土器と通ずる点が多いのであります。また亀ケ岡式土器の名で知られる縄文時代晩期の土器も、決して東北地方に限られたものではなく、北海道の道南や道央からも発掘されております。ですから、東北地方、とくに東北北部と北海道は文化のルーツを共有しているといっても過言ではなく、蝦夷の文化とアイヌの文化の出発点には強い共通性があるということにもなるのであります。

最近も東北地方で行なわれました考古学的な発掘調査で、蝦夷アイヌ説の方にむしろ有利な事実が確認されております。北海道では西暦四世紀には後北［コウホク］C2・D式土器と呼ばれる土器が極めてポピュラーで、北海道各地はいうに及ばず北方領土に至るまで形や模様が全く同じ土器が見つかっております。そして最近まではこの土器は北海道独自の土器と考えられていたのですが、最近になって同じものが東北地方の北部にもかなりポピュラーに存在することがわかってまいりました。資料にあげましたものは秋田県能代市寒川［サムカワ］遺跡出土のもので、楕円形をした墓穴の中から見つかっています。このようにお墓のスタイルといい、土器の模様や形の特長といい、北海道と全く同じものが東北地方にもあるのであって、四世紀には少なくとも東北地方の北半分は、完全に北海道と同じ文化の広がりの中にあったということが、比較的最近になって確認されたのです。この点なども、東北地方北部と北海道との近縁性を示すもので、蝦夷日本人説にとって都合が悪く、蝦夷アイヌ説の立場の方がうまく説明ができる事実であります。

次に東北地方にも北海道のアイヌ語にもとづく地名と同じスタイルの地名（アイヌ語地名）があることについてお話いたします。このことはすでに菅江真澄［スガエマスミ］や松浦武四郎などの江戸時代の旅行家などの文献にも出ているのですが、近代的な意味でのアイヌ語研究の開祖である金田一京助先生は昭和7年に「北奥地名考」という論文を書いて、地名からみると北海道と東北は連続していると論じ、またこの点を主な根拠として蝦夷アイヌ説を主張いたしました。戦後になるとアイヌ語地名の研究に徹底した実地調査の手法を取り入れた山田秀三先生が、さまざまな実例をあげて東北地方のアイヌ語地名とはどのようなものかについても具体的に説明なさいました。

アイヌ語地名とはどのようなものかについては、よくご存じの方もいらっしゃると思いますが、ここでは金田一先生や山田先生のご研究を紹介する形で、東北地方の例をあげてみることにいたします。稚内とか登別のように語尾にナイ（nay 沢）やベッ（bet 川）がつく地名はアイヌ語地名の代表とされていますが、そのような地名は北海道に限られたものではなく東北地方にも多くあります。また登別とか稚内のようなタイプのものだけではなく、ほかのタイプのものも東北地方にも多く見られます。

語尾にナイがつくタイプの東北地方の実例を少しだけご紹介しますと、青森県弘前市の十腰内［トコシナイ］、青森市の平内［ヒラナイ］、秋田県田沢湖町の小保内［オボナイ］、秋田県鹿角市の毛馬内［ケマナイ］、岩手県岩手町の沼宮内［ヌマクナイ］など、たくさんあります。

～ナイのタイプの場合、語頭にオという語がついてオ～ナイの形になる例が多くあります。この時のオは「川尻」の意味で、オ・サッ・ナイo-sat-nayであれば川尻・乾いた（水が砂に吸い込まれるなどのために川尻に水がない状態）・沢、オ・サル・ナイo-sar-nayであれば川尻・葦（葭）（がある）・沢であります。長内［オサナイ］（青森県大鰐町、秋田県鹿角市、岩手県下閉伊郡岩泉町小本、岩泉町中島、下閉伊郡田老町乙部、岩手郡雫石町御明神、久慈市など多数）はオ・サッ・ナイまたはオ・サル・ナイで、尾去沢［オサリザワ］（秋田県鹿角市）はオ・サルに和語の沢がついた形でしょう。

東北地方にも～ベッのタイプの地名もあります。秋田市仁別［ニベツ］、津軽半島の今別［イマベツ］などです。また苫米地［トマベチ］［tomaエゾエンゴサクの塊茎、tomam湿地］（青森県三戸郡福地村）のほか、～淵、～部、～辺［ベ］、～壁［カベ］、～首［カベ］のタイプの地名も～ベッに由来するか、あるいは-pe（～する〔ある〕もの）のタイプの可能性があるということです。馬淵［マベチ］川（岩手県北部に発し青森県八戸市で太平洋に注ぐ）、長流部［オサルベ］（岩手県二戸郡浄法寺町）、袰部［ホロベ］、袰部沢（岩手県二戸郡安代町兄畑）、乙部［オトベ］［o-to-bet］（岩手県下閉伊郡田老町、盛岡市都南）、達曾部［タツソベ］［tat〔カバの木の皮〕-so〔剥ぐ〕-pe］（岩手県上閉伊郡宮守村）、女遊戸［オナッペ］（岩手県宮古市）などがその例です。

～ウシの形の地名もアイヌ語地名によくあります。これは～ウシ・ナイusi-nayのナイが省略された場合と、～・ウシ・イus-i（名詞＋ウシは沢山ある、群生しているの意味となり、動詞の後につくとその動作をいつもするというような意味になり、イiは「～の者」「～の物」「～の所」などと訳される）の場合とがあるといいます。東北地方の～ウシの例では附馬牛［ツクモウシ］［tokom〔コブ、小山〕-us-i］（岩手県遠野市）、撫牛子［ナイジョウシ］（弘前市）、木伏［キップシ］（盛岡市）などがあります。津軽石［ツガルイシ］川（宮古湾で海に注ぐ）、猿ヶ石［サルガイシ］川［sar-ka-〔一ノウエ、一ノホトリ〕-us-i］（岩手県遠野市、花巻市を通り北上川に注ぐ）の川の名もこの形からきている可能性が高いということです。

イの前にオマという語がきて～・オマ・イoma-iの形をとる例もよくありますが、このタイプのものでは、馬子舞［マコマイ］（岩手県宮古市山口）［mak〔奥、山奥〕-oma-i］、見前［ミルマエ］（盛岡市都南）、尿前［シトマエ］（岩手県胆沢郡胆沢町若柳）、世田米［セタマイ］（岩手県気仙郡住田町）、軽米［カルマイ］（岩手県九戸郡軽米町）、鵜住居［ウノヅマイ］（岩手県釜石市）などがあり、漢字で～舞、～前、～米などと記される地名はこのタイプである可能性があります。

ポロ（大きい、多い）という語がつく例では袰月［ホロツキ］［tuki坏］（青森県北津軽郡今別町）があり、現地に行ってみますと湾の形が大きな坏を思わせる丸い形をしています。保呂内沢［ホロナイザワ］（宮城県鳴子町）はホロ・ナイ（大きな沢）にさらに和語の「沢」がついたものでしょう。谷内［タニナイ］（岩手県和賀郡東和町）は丹内［タンナイ］とも書かれますが、中世から江戸時代の古文書には種内［タネナイ］とあって原形がタンネ・ナイ（長い・沢）であることがわかります。種差［タネサシ］（八戸市）も［tanne-esasi（長い・岬）］で、現地に行ってみると海に突き出した細長い岬が特徴的で、地名に嘘はないということが実感できます。姉沼［アネヌマ］（青森県三沢市）は小川原湖の南にある細長い沼であるが、江戸時代にはアネト沼と呼ばれており ane-to［細い・沼］が原形であることがわかります。

秋田の比内［ヒナイ］郡（肥内郡とも書く、秋田県大館市とその周辺）はpi-nay（小石・沢）でありましょう。pi-nayの頭にsat［乾いた］がつくsat-pi-nayの形は北海道にもあり、ふだんは水がほとんど流れていない石ころばかりの沢の意味だといいますが、佐比内［サヒナイ］と記す例は岩手県遠野市上郷町、岩手県紫波郡紫波町、岩手県二戸郡安代町などにあります。似内［ニタナイ］（岩手県花巻市）はニタッ・ナイ、似鳥［ニタドリ］（岩手県二戸市）は［nitat-or中、所］はニタッnitat（湿地、やち）に由来すると思われます。来内［ライナイ］（岩手県遠野市）はライray（死んでいる、川でいえば古川に水が流れずに停滞しているような状態）・ナイ、目名［メナ］（下北郡東通村）はメナmena（上流の細い枝川）、猿辺［サルベ］川（青森県三戸町から南部町を流れる馬淵川の支流）、猿田［サルタ］（秋田市、秋田県平鹿郡大森町）などはサルsar「葭原」に由来する地名でしょう。

東北地方には～タイの形をとる地名が多く、漢字では～帯、～体、～平、～岱などと書くのですが、これは森・林を意味するタイtayに由来します。姉帯［アネタイ］（岩手県二戸郡一戸町）、姉体［アネタイ］（岩手県水沢市）、腹帯［ハラタイ］（岩手県下閉伊郡新里村）、仁左平［ニサッタイ］（岩手県二戸市、なお『日本後紀』には蝦夷の村として爾薩体［ニサッタイ］村が見える）、狐岱［キツネタイ］（秋田県北秋田郡森吉町）がその例です。また東北地方には和語の樹木名＋平［タイ］のタイプの地名も多くあります。

トイtoyは「土」の意味ですが、地名にトイの語が含まれる場合は多くは食用になる土（白い土で、かつてはビスケットなどにも粉にまぜて用いられた）のことで、トイ・オマ・ナイtoy-oma-nayのような形になる。豊間内［トヨマナイ］（青森県五戸町、八戸市を流れる馬淵川の支流）、豊間根［トヨマネ］（岩手県下閉伊郡山田町）、登米［トヨマ］（宮城県登米郡登米町）、豊間［トヨマ］（福島いわき市）などはトイ・オマ・ナイが原形である可能性があります。

アイヌ語地名は東北北部に比べるとだいぶ少ないのですが、東北の南の方にもありますのでその例をあげてみます。タプコプtapkopは、山田先生は「たんこぶ山」と日本語に翻訳なさった特徴的な形の山で、北海道には釧路湿原展望台のそばの例をはじめとして各地にあります。タプコプは日本語の話手の耳にはタッコと聞こえますので、東北地方ではそれに「山」「森」を添えて立子山、達子森となることが多いようです。達子森（秋田県北秋田郡比内町）、達居森（宮城県黒川郡大衡村）がいずれも同様な形状で、ほかに田子（青森県三戸郡田子町、秋田県山本郡山本町、岩手県二戸郡一戸町小繋、岩手県岩手郡葛巻町葛巻）の地名も多く、やはり同様な形状の森があります。高森、鷹森などの地名のなかにもタッコに漢字をあてたものが多いのではないかと思われます。そして私が勤めている福島大学のすぐ近くにも立子山［タッコヤマ］という山があって、やはり形がタプコプなのです。福島市の仁田沼［ニダヌマ］は、水芭蕉で知られる湿地です。苫小牧市のウトナイ湖はut（肋骨）・ナイで、肋骨のように何本もの川があることからの地名であるといいますが、宇内［ウナイ］（福島県会津坂下町）は古くは打内と書きましたので、やはり肋骨・川でしょう。

このようにアイヌ語地名が東北地方に多くあるのは、古代蝦夷の言語がアイヌ語と同じ系統のものであった強力な証拠になると思われます。ただし東北でアイヌ語と同じ系統の言葉が使われていたのは、おそらくは平安時代くらいまでで、その後は東北北部まで徐々に日本語の世界になってしまったのでしょう。だから東北地方でアイヌ語と同じ系統の言語が生きていたのは、今から千年以上も前の話だということになります。その上に北海道と東北では地域差もありますので、現代のアイヌ語の辞典によって東北地方のアイヌ語地名の一つ一つの意味を調べようと思ってもわからない方が当たり前で、わかるのは極々まれであって当然であります。東北のアイヌ語地名の大部分は本来の意味はわからなくなっているのであります。

資料にあげたものは金田一先生とか山田先生がこれならば、もとの意味がほぼわかるもの、現地へ行ってみると地形などが地名にふさわしい特長があると認めることができるものとしてあげている例であります。ただ全体的に見て、東北地方にも北海道のアイヌ語にもとづく地名と同じタイプの地名がたくさんあり、しかも単独ではなく集中して存在します。山田先生がお示しになった例では、秋田県の阿仁［アニ］地方ですが、笑内［オカシナイ］、粕内［カスナイ］、湯口内［ユグチナイ］、比内沢［ヒナイザワ］これは沢は日本語ですが比内は小石まじりの沢ということにでもなるのかもしれません。横支内［ヨコシナイ］、惣内［ソウナイ］、それから沢と言う日本語がついていますが米内沢［ヨナイザワ］、米内［ヨナイ］という地名も盛岡市内など東北各地にあります。山田先生によればヨナイはイ・オ・ナイで、この場合のイはヘビとかクマなど名前を直接にいうことをはばかるものをさし、イ・オ・ナイは「それ」がうようよいる沢ということだそうであります。間内沢［マナイザワ］、沢だけが日本語でしょう。浦志内［ウラシナイ］、桐内［キリナイ］、相内［アイナイ］、と集中しております。山田先生は阿仁地方の地名のあり方を石狩川流域の樺戸［カバト］の付近と比較して、よく似ているといっておられます。

アイヌ語地名が東北地方にも数多くあるという問題は、蝦夷アイヌ説に徹底的に有利な事実と言わざるを得ないでしょう。

マタギ言葉についてもお話しておきます。青森県から新潟県までの東北地方の背骨になっている奥羽山脈の山あいのところにはマタギというプロの狩人の方々が住んでおられました。マタギの人達は、山に狩りに入る時だけに、特別な言葉を使わないと山の神様の怒りに触れるということで、里で使っていた言葉とは違う言葉を使うというしきたりがあったそうであります。それを山言葉とかマタギ言葉というのでありますが、それには非常にたくさんのアイヌ語と共通する単語があることが、江戸時代以来指摘されております。この点は江戸時代では旅行家の菅江真澄などが、近代になると民俗学者の柳田国男先生や若くして亡くなった歴史家の大島正隆先生、そしてもちろん金田一京助先生、知里真志保先生などのアイヌ語の専門家など多くの方々が注目されていることであります。例えばマタギ言葉では、犬のことをシェタとかセタと、心臓のことをサンベと言う。水とか酒とかとにかく液体はワッカと言う。水が溢れて洪水になったような状況をポロワッカと言う。大水です。そういう例がたくさん報告されております。これも東北地方でかつてはアイヌ語と同じ系統の言葉が話されていた根拠になると思います。そしてこれも言うまでもなく蝦夷アイヌ説に有利な事実であります。

その上に、蝦夷は平安時代末以前はエミシと発音し、それ以後はエゾと読むようになりまして、鎌倉・室町時代後はもっぱらエゾと言えばアイヌの人達、あるいはアイヌの人達の祖先のこと、蝦夷地といえば北海道のことというふうに評価が定まってきます。このように平安時代末以前はエミシ、それ以後はエゾと読みはかわりますが、読みが時代によって変化するのはよくあることでしょうから、読みの変化ということをこの際横に置いておきますと、奈良時代・平安時代のエミシと、アイヌの人達、あるいはアイヌの人達の祖先を意味するエゾとが同じ「蝦夷」という文字が使われているということが、実

は蝦夷アイヌ説の重要な論拠として江戸時代以来蝦夷アイヌ説の最大の論拠とされてきたことであり、私は蝦夷アイヌ説の論拠のなかでもきわめて重いというふうに受け止めております。

なお平安時代の末の、エミシからエゾと読み方が変わった直後くらいでは、北海道の人達だけではなく、青森県の津軽辺りの人を含めてエゾと呼ばれています。念のために申し添えておきます。

このように蝦夷日本人説の論拠の中に事実として認めなければならないことがある一方で、蝦夷アイヌ説の論拠のなかにも事実としての重みがある点が多々ありますので、決して蝦夷アイヌ説が否定されるということにはならないということがご理解いただけたと思います。蝦夷アイヌ説と蝦夷日本人説は二者択一の論理では解決できないとすると、蝦夷日本人説と蝦夷アイヌ説を統一的に理解する道をさぐらなければなりません。

そこで北日本を北海道、東北地方北部、東北地方南部の三地域にわけ、それぞれの地域の古代文化の変遷をたどってみることにいたします。

## 2

## 5　北日本古代文化の変遷

### イ　北海道

ここでは旧石器時代のことは省略して縄文文化の時代からはじめます。北悔道では縄文時代の次には続縄文文化の時代、擦文［サツモン］文化の時代がきます。そして擦文文化の時代に後続するのがアイヌ文化の時代であります。そしてアイヌ文化の時代こそがアイヌ民族が成立した段階ということになります。

ここで北海道の古代文化の変遷を考える上でもその出発点となる縄文文化についてふれておきます。縄文時代は今から約一万年程前にはじまります。教科書には縄文文化は九州あるいは沖縄まで広がっていると書いてあるものもあるようですが、厳密に申しますと典型的な縄文文化は、西日本には見られません。典型的な縄文文化がひろがった地域は中部地方、関東地方、東北地方、そして北海道であります。東日本、北日本の地域には落葉広葉樹の森が発達しております。それに対して西日本はもともとは常緑広葉樹の世界でありました。

落葉広葉樹の森がひろがる地域は、食物の問題を取りあげただけでも、植物質や動物質の食料資源に満ち溢れております。落葉広葉樹のかなりの種類にはドングリが実をつけます。縄文人の主食は、実は鹿や猪の肉ではなく、栗、クルミ、ドングリやトチの実などの植物質の食料資源だったということが最近の研究でわかっております。もちろん常緑広葉樹に属する樫の木にもドングリが実をつけますが、食物になる木の実をつけるのは圧倒的に落葉広葉樹が多いのであります。そして落葉広葉樹の森の内外にはワラビやフキなどの山菜もたくさんあります。キトビルもあります。キノコもたくさんとれます。その上に落葉広葉樹の森から流れ出る川には鮭が遡上してきます。

もちろん縄文人にとっても動物質の食料資源もまた大切だったのですが、落葉広葉樹の柔らかい木の葉や下草は鹿などの大好物でしたから、落葉広葉樹の森のひろがる地域は動物質の食料資源にも恵まれていました。典型的な縄文文化が東日本・北日本で発達したのは、落葉樹の森の豊かさと深い相関があるのであります。私の考えでは縄文文化は東日本・北日本の気候環境に大変によくマッチした、かなりにハイレベルの文化であろうと思っております。そして北海道もまた落葉広葉樹の森がひろがっている世界の一角に位置しているのであります。したがって典型的な縄文文化が北海道にもひろがっていて不思議はないのであります。その実例をご紹介いたしますと、最近有名になった青森市三内丸山遺跡で発掘される円筒土器と全く同じ土器は北海道の道南部でも普遍的に発見されます。また縄文時代の一番おしまい頃の東北の亀ケ岡式土器も北海道からも発見されます。そして東北地方と北海道、とくに東北北部と道南地方の縄文土器は、縄文時代を通じておおむね形や模様が同じであります。これは津軽海峡をはさむ両方の地域の文化の姿が共通であったことを意味しており、津軽海峡が異なる文化の境界線となっていないことに注目しておきたいと思います。

一般の常識では縄文文化の時代の次には水田稲作を行なう弥生文化の時代になります。しかし本州でお米を作るようになっても、北海道ではお米を作ることが行なわれませんでした。したがって北海道では、縄文時代が終わっても縄文時代的な暮らし振りがそう大きく変わることはなかったのです。この文化を考古学では続縄文文化と名づけております。続縄文文化の時代の土器は一般の方がご覧になると、縄文土器だというふうに判断なさっても何の不思議もなく、土器の表面にも縄文がついていますし、複雑な模様もあります。こういうことからも北海道では縄文時代人の生活のスタイルがそう大きく変わらないまま、次の時代まで続いていたということがわかります。

なお続縄文文化の時代は前半段階と後半段階にわけて考えるとわかりやすいようです。前半段階は本州の弥生文化の時代に年代の上で併行し、後半段階は古墳時代に併行いたします。前半段階では道南・道央・道東・道北部にそれぞれ模様などの特徴が異なる土器が分布しており、北海道内に少しづつ生活内容を異にする複数の続縄文文化が並び立っていたことがわかります。ところが後半段階になると北海道全域の文化がひとつにまとまり、道内のどの地域から発掘される土器も形や模様が同じになるのであります。

そして続縄文文化後半段階の文化は、北海道に限られるのではなく東北北部一帯にまで広がるのであります。したがって東北地方の南部から中部にかけては前方後円

墳などの古墳が作られていた時期の東北北部は、北海道と同じ文化圏に属するようになっていたことになります。続縄文文化の前半段階に相当する時期の東北北部には、水田稲作が及んでいたことが考古学の発掘調査によってわかっておりますが、その次の時期になると東北北部の水田稲作は中断に追い込まれたのであります。私はこの現象を、一旦は津軽平野まで北上した稲作前線が南に押し戻されたと表現しております。

このようなことが起こった原因は気候の冷涼化であったと思われます。コメという作物は、もともとは中国南部の温暖な地域で栽培作物となったものであり、本来であれば東日本や北日本のような環境は、コメ作りの限界の地域でありました。だからほんのわずかな気候の変動でも東北北部のようなところでは稲作が行なえなくなったのだと思います。気候の冷涼化は北日本の落葉広葉樹の森の豊かさを損ねました。また北海道南部の噴火湾や西海岸沿岸における暖流系の魚類に多くを負っていた人々の生活も大打撃を受けたようであります。こうして北海道から東北北部にかけての地域では、定住生活さえかなり困難な不安定な生活に追い込まれたように思われます。続縄文文化の後半段階はこのような時代でありました。

しかし六世紀後半ころから気候は温暖化の方向に向かいはじめたようで、東北地方北部では水田稲作が復活し、北海道を含む北日本全体で畑作も行なわれるようになり、落葉広葉樹の森の豊かさももどって、安定した生活が可能になりました。そして北海道ではアイヌ文化の時代の原形が形づくられた擦文文化の時代がまいります。擦文文化という名前は土器の表面に木の板で土器を整形する時についた擦痕があることによります。擦文土器には擦文のほかに、沈線による模様がつけられますが、縄文はありません。北海道の古代文化でも縄文文化の伝統がここで大きく変わり、新しい要素が加わったことを象徴する現象であります。

擦文文化では狩猟、漁撈、採集とともに農業も行なわれており、大麦、粟、キビ、小麦、稗、ソバ、小豆などが栽培されていたということです。擦文文化の集落は壁面にカマドが作り付けになっている方形の竪穴住居によって構成されています。そして土器はカマドにかけて食物の煮沸に用いる甕と食器として用いる坏［ツキ］が中心であります。擦文文化は集落のあり方、住居の構造、土器が甕と坏からなっていることなど、同じ時代の東北地方の文化とよく似た点が多いのであります。

同じ時代の東北地方の文化とは、土師器［ハジキ］の文化であります。東北地方の南部では、古墳時代から一貫して土師器の文化が継続しております。一方、東北地方北部では古墳時代に併行する時期の文化は続縄文文化であり、気候が温暖化した七世紀過ぎから土師器の文化がゆきわたります。つまり土師器の文化は気候の温暖化にともなってその範囲を北に広げたということになるのであります。そして擦文文化は一面では土師器の文化が津軽海峡をこえて、より北に広がったものであるとみなすことができます。ただし擦文文化のもう一つの側面は、続縄文文化の後身であるということであり、この点を無視することはできません。擦文文化は本州的な土師器の文化が北に広がったものではあっても、本州の人たちが北海道にわたって作りあげた文化ではなく、続縄文人が環境の変化に対応し、また本州の人たちとの交流を通じて築きあげた文化だと考えるべきでありましょう。擦文文化は北海道続縄文人の子孫が展開した文化なのであります。ただし交流がある限り、人間が相互の往来があったことはまちがいありません。

擦文文化のなかにはアイヌ文化に連続する要素が多くあります。例えばアイヌ文化の大きな特徴とされる「送り」、すなわち獲物とした動物や生活に必要な道具などの本体は神であると考え、それらを神の国に送り返す儀礼は擦文文化にも見られるといいます。アイヌのイクパスイ（ikupasuy）もすでに擦文文化の段階に出現しているようです。擦文文化の回転式離頭鈷（獲物の体内で90度回転し、はずれにくい仕組のはなれモリ）はアイヌのキテ（kite）に連続し、擦文土器の底部によくあるヘラ記号とアイヌのイトゥパ（itokpa祖印）、擦文文化の遺跡から発掘される繊維製品とアイヌのオヒョウ、イラクサなどの着物の織り方との類似なども指摘されています。サケを捕獲する時に用いるマレゥ（marek回転式の鉄鉤）、川に杭を打ち込み、木の枝などをからめて魚を追い込むテシ(tes)、莫蓙を編むときのコモツチなどは擦文文化の遺跡から発掘されるものとアイヌのものとは同じものであり、このような例は発掘調査が進んで木製品などの類例が増加すれば、ますます明らかになるでしょう。アイヌ文化を特徴づける遺跡として知られているチャシ（casi）についてもその古段階のものは擦文文化の段階に出現しているのではないかと思われます。

擦文文化の終末年代はほぼ一三世紀ころであろうとされています。北海道では擦文文化をもって土器文化が終末をむかえ、以後は少数の例が知られている土鍋をのぞいて土器を作らなくなります。土器文化の終末とは、食物の煮沸に土器を用いなくなるということで、大形の甕やすり鉢などの陶器はなお用いられています。煮沸具としての土器が消滅するのは、この段階で新たな煮沸具として本州から移入された鉄鍋が普及したことを意味しています。また擦文文化の終末頃には竪穴住居にかわって地上住居が出現し、擦文文化の終末と時を同じくして竪穴住居が作られなくなりますが、竪穴住居の消滅は鉄鍋の普及との関連で説明できます。竪穴住居の壁にはカマドが作り付けになっていますが、カマドは煮沸具としての細長い甕を落しこんで用いるのに都合の良い構造です。ところが鉄鍋が用いられるようになると、炉（イロリ）に上から吊して用いるほうが便利ですし、カマドよりも炉のほうが暖房を取るためにも便利です。こうしてカマドが不必要になると、カマドを設けるために地面を掘りこむ必要もなくなるので竪穴住居が作られなくなり、かわって地上住居が普及するのだと考えられます。こうしてアイヌ文化期の地上住居であるチセ（cise家）

が出現するのです。

ただ若干の問題点がございます。それは根室、網走、稚内というようなオホーツク海、あるいは宗谷海峡に面したところの海沿いのみに認められるオホーツク文化と呼ばれている古代文化とアイヌ文化との関係です。オホーツク文化は南サハリン辺りに源流がある文化であるといわれておりまして、多くの点で大変に特徴的であり、北海道における縄文時代以来の古代文化の変遷の流れには乗ってこない、外来の文化であります。この文化はこれまで擦文文化とほぼ同じ年代のものであって、擦文文化と長期にわたって併存したのだと考えられてまいりました。そうであれば、擦文文化の次のアイヌ文化の成立にあたって、とくに道東地方のアイヌ文化の成立にあたってはオホーツク文化がある程度、あるいは相当程度にかかわっているのではないかということが充分に考慮されなければなりません。しかし最近の研究によりますと、オホーツク文化そのもの、または典型的なオホーツク文化に展開してゆく前の段階の文化が北海道に及んできたのは、続縄文文化の後半段階であり、北海道のオホーツク文化は擦文文化の終末に先んじて姿を消すのだともいわれるようになりました。擦文文化は一二世紀あるいは一三世紀ころまで続くとされておりますので、北海道のオホーツク文化人は、大部分は一二世紀あるいは一三世紀以前に北海道から撤退し、一部は擦文文化人と融合したということになります。そうであればアイヌ文化やアイヌ民族の成立にオホーツク文化人の影響があったとしても間接的なもので、オホーツク文化を直接の母体としてアイヌ文化やアイヌ民族が成立したのではなさそうであります。

やはり北海道の古代文化は大筋として縄文文化、続縄文文化、擦文文化、アイヌ文化という変遷をたどったのであり、南サハリン方面を源流とするオホーツク文化は、北海道の古代文化に一定程度の刺激と影響を与えたではありましょうが、オホーツク文化人がある時期に北海道の住民の主体となったということはなさそうであります。そしてそういう意味で、北海道の縄文文化の担い手の子孫は、何段階かの文化の変遷をたどった後に、アイヌ文化の担い手、すなわちアイヌ民族になったと考えるのが妥当ではないかと思っております。アイヌ文化の担い手でありますアイヌ民族の人たちのルーツについては、いろいろといわれてまいりましたが、考古学的には北海道縄文人の子孫であるというほかはないだろうと思っております。

## ロ　東北地方南部

東北地方南部の古代文化の変遷はきわめて常識的で、多くの方々が教科書などでご存じの通りの変遷を示します。縄文文化の次にくるのは東日本型の弥生文化であり、水田稲作はこの段階で普及・定着して、その後は現在にいたるまで稲作の中断はありません。そして大和朝廷が成立すると東北地方南部まではかなり早い時期のその政治的な影響が及び、前方後円墳などの古墳が作られるようになります。古墳時代に本格的に古墳が造られた地域は、おおむね仙台平野以南であります。そして東北地方南部のうちの阿武隈川河口以南の地域には六世紀から七世紀の半ばすぎまでの地方制度である国造［クニノミヤッコ］制も行なわれ、奈良時代になると陸奥国や出羽国の領域となって、ごく一般的な律令制下の日本の一地域となります。

したがって東北地方南部のうちの阿武隈川河口以南の縄文人の子孫は弥生文化を受容し、古墳時代以後は朝廷の支配下に入って日本民族の一員となって、中世・近世をへて現在の東北地方南部日本人にいたっているということになります。関東地方や中部地方の縄文人の子孫もこのような道筋を経過して現在の関東地方日本人、中部地方日本人となったと考えられますので、東北地方南部の縄文人の子孫がたどった道は、東日本一円の縄文人の子孫がたどった道とほとんど変わるところがないといえます。東北地方南部の古代文化の変遷がきわめて常識的だと申し上げたのは、このような意味においてであります。

## ハ　東北地方北部

東北地方の北部の古代文化を見ますと、縄文時代以来北海道、とくに道南地方とは類似する文化の変遷をたどっております。この地域では弥生時代に併行する時期に一時的に水田稲作を受け入れたことがありましたが、この段階の稲作はそのまま普及定着したのではなく一旦は断絶し、しばらくの間は北海道に中心のある続縄文文化の圏内にありました。その後、七世紀ころになると稲作前線の再北上があり、この地域では再度稲作が行なわれるようになり、土師器の文化が見られるようになります。

東北地方北部は古代蝦夷の本場といえる地域ですが、このうち、盛岡市と秋田市を結んだ線から南の部分は平安時代のごくはじめに坂上田村麻呂などの将軍が大軍を率いて攻め込み、政府側の直轄支配地に組み入れられてしまいました。しかし盛岡市・秋田市以北は平安時代の末近くまで、政府の直接支配が及ばない地域でありました。ただし政府がわの政治的・文化的・経済的な影響は徐々にこの地域にも強く及ぶようになっていきました。そして平安時代の末には平泉藤原氏の力を借りながら青森県まで郡の制度が行なわれるようになって、東北北部まで中央政府の直轄支配地に組み入れられる下地ができあがり、鎌倉時代になると完全に幕府の支配が及ぶようになりました。こうしてこの地域も政治的にはもちろんのこと文化的にもいちじるしく日本化し、この地域の住民は日本民族の一員に組み込まれることになりました。

このように見ると、東北地方北部の縄文人の子孫がたどった道は北海道の縄文人の子孫がたどった道とも、東北地方南部の縄文人の子孫がたどった道ともちがうこと

がわかります。ただし全体としていえば、東北北部縄文人の子孫がたどった道は、途中までは北海道縄文人の子孫がたどった道とよく似ているものの、ある時期からは徐々に東北南部縄文人の子孫がたどった道との共通性が強くなると、まとめることができそうです。このことを別の言葉で表現するならば、東北北部縄文人の子孫は途中までは北海道縄文人の子孫とともにアイヌ民族を形成する可能性がある道を歩んでいたのですが、徐々に北海道縄文人の子孫とは異なる道を歩むことになり、最終的には本州の縄文人の子孫のなかでは最後に日本民族の一員となった人々である、ということにもなるでありましょう。そしてこのように考えるならば、蝦夷アイヌ説に有利に見える根拠も、蝦夷日本人説に有利な根拠もともに存在することも当然だということになるでありましょう。

## 6　古代蝦夷の諸段階

そして実は一口に蝦夷といっても、時代によって主にどの地域の人々が蝦夷といわれたのか、また蝦夷という語の語義は同じではないのであります。

「蝦夷」はふつうは「エゾ」と読みますが、平安時代の末近くまでは「蝦夷」と書いて「エミシ」と読みました。「蝦夷」と記して「エゾ」と読むようになるのは平安時代の末近くになってからであります。なお「エミシ」という語は平安時代末以後も「エビス」と変形した姿で後世まで生き残りました。「エビス」はやや軽蔑のニュアンスをこめた東国の人たちに対する呼称でありましたが、ほかに七福神のひとつに数えられる神様の名前として現在でも生きています。「エミシ」という語のより古い漢字表記は「毛人」でありました。「毛人」から「蝦夷」への用字の変化があったのはほぼ七世紀のなかばころです。しかしそれ以後もしばらくの間は「毛人」という記載法も行なわれていました。ただし「毛人」と書くにしても「蝦夷」と書くにしても、どちらもいわば当字であり、もともとは「エミシ」という日本語の古語があったようです。

このような「エミシ」「エゾ」の変遷は大きく五つの段階にわけて説明するとわかりやすいようです。その第一段階はほぼ五世紀以前で、この段階では「エミシ」という語は東国人をひろく意味しておりました。この段階では大和朝廷の勢力は一応は関東地方からさらには東北地方の南部まで及んでおりましたが、なおそれは安定したものではなく、時によっては大和の王族や重臣が遠征にでて、地方の勢力と戦うこともありました。そして「エミシ」という語は時には大和の勢力と戦うこともあった東国人をひろく意味したのです。この段階の「エミシ」という語には、強い人たち、恐るべき人々、それ故にいささか敬意を払うべき人たちというニュアンスがあったようです。「エミシ」に「毛人」という漢字が当てられることになるのは、この段階です。「毛人」の表記がはじめて見えるのは雄略［ユウリャク］天皇とされる倭王武［ワオウ・ブ］が中国に送った上表文でありますので、「毛人」という漢字表記が行なわれるようになったのは、五世紀のころの日本を含む東アジアの複雑な国際関係がその背景にあったと考えられます。

第二段階はほぼ六世紀から七世紀の前半で、この時期には朝廷の直接支配の外の人たちが「エミシ」と呼ばれました。この段階では日本海側では信濃川・阿賀野川の河口以南、太平洋側では阿武隈川の河口以南の地域に国造［クニノミヤッコ］制という地方制度が行なわれるようになり、この範囲では基本的には大和に敵対する勢力は存在しなくなりました。しかしなお国造制が行なわれた地域のさらに外側の住民は時には朝廷の軍とも戦うことがありました。そこでこの地域の人々が「エミシ（毛人）」ということになったのです。

この段階の「エミシ」の主流は、仙台平野など東北地方中部の人たちなのですが、仙台平野に代表される東北地方の中部の地域では、弥生時代以来水田稲作が行なわれていましたし、古墳時代には前方後円墳なども多く作られており、文化伝統の上では阿武隈川河口以南の地域と差が見られません。したがってこの段階での「エミシ」という語にはなお、強い人たち、恐るべき人々、けれどもいささか敬意を払うべき人たちというニュアンスが含まれてはいましたが、それに加えて朝廷の直接支配の外の人たちという語義が強く意識されるようになっています。ただしまだ異文化の担い手という意味はほとんどなかったでしょう。

第三段階は大化の改新から平安時代の初期までです。大化の改新からあまり時が隔たらない時期に国造制にかわる新しい地方制度として国郡制が施行され、蝦夷の地域を管轄する国としては陸奥国と出羽国が置かれました。そして平安時代初期までに国造制が行なわれていなかった地域のうち、盛岡市と秋田市を結ぶ線以南の地域には多賀城や胆沢城、秋田城などの城柵が造営され、郡が置かれて陸奥国と出羽国の領域に組み込まれました。

この段階で政府の直轄支配地に組み入れられた盛岡市と秋田市を結ぶ線以南の地域は、仙台平野のように弥生時代・古墳時代にさかのぼって、国造制が行なわれていた地域と文化伝統を共有する地域と、それ以北の文化伝統からいえばむしろ北方世界につらなる地域にわけることができます。南の仙台平野などの地域は七世紀末・八世紀初頭までに政府の直轄支配地に組み入れられたのですが、宮城県北部から北と秋田県に属する部分は奈良時代の後半以後に直轄支配地に組み入れられています。このように文化伝統の点でも直轄支配地に組み入れられた年代の点でもより南の部分と北の部分ではちがいがありますので、第三段階は前半の小期と後半の小期にわけて考えるとわかりやすいようです。

この段階の特徴はしばしば政府軍の大軍が組織され、蝦夷の軍との戦いが行なわれたことです。戦いは前半の小期にもありましたが、とりわけ大規模な戦いは後半の小期に見られます。その代表的なものとしては宝亀11

(780) 年に起きた伊治公呰麻呂［コレハリノキミアザマロ］の乱と、延暦年間に坂上田村麻呂が登場して阿弖流為［アテルイ］らにひきいられた岩手県胆沢地方の蝦夷の軍とが激しく戦った例をあげることができるでしょう。

この段階の前半の小期においてすでに、政府の関心は北海道にいたる北方世界にも向けられ、斉明［サイメイ］朝には阿倍比羅夫［アベノヒラブ］にひきいられた100艘以上もの水軍による遠征も行なわれました。そしてこのような状況を反映して「エミシ」の語義にも、政府の直接支配の外の人たちという点に加えて、文化伝統の異なる人々という点が意識されるようになってくるのです。またやはり斉明朝ころに「エミシ」の漢字表記が「毛人」から「蝦夷」に変わります。この変化の要因には天皇の徳を慕って来貢する異族の存在をアピールする意図がこめられていましたので、この面からも「エミシ」の異族としての要素が強調されるようになりました。

第四段階は平安初期から平安末期の平泉藤原氏の時代までです。この段階では陸奥国・出羽国の領域の拡大はなく、盛岡市と秋田市を結ぶ線以北が蝦夷の地域である状態が長期にわたって継続しました。前段階の最終場面で政府側が大軍を投入して領域の拡大をくわだてる政策を放棄したからです。ただしこの段階においては政府側の政治的・経済的・文化的な影響はより強力に北海道を含む北方に及ぶようになっています。秋田県北部の蝦夷の反乱である元慶［ガンギョウ］の乱、蝦夷系の大豪族安倍［アベ］氏が滅亡した前九年の合戦、清原［キヨハラ］氏の内部分裂に端を発した後三年の合戦、前九年・後三年の合戦の結果をふまえて成立した平泉藤原氏の政権の出現、また近年の考古学的な研究によって知られるようになった東北北部から北海道の一部に及ぶ防御性を高くした集落の盛行などは、すべてこの段階における出来事であります。

私は10年計画で防御性を高くした集落のうちの、海抜400から500メートルの山の上にある集落の発掘調査を岩手県北部の西根町で行なっておりますが、これらは山奥のけわしい谷を天然の要害としているうえに、人工的な堀をめぐらすものさえあって、守りを堅くしております。そして私はこれらの防御性を高くした集落の出現が、なんらかの意味で北海道のチャシの出現にもかかわりがあるのではないかと考えておりますが、今回はくわしく述べることは省略いたします。

いずれにせよ、この段階の蝦夷の主体は盛岡市と秋田市を結ぶ線以北の本州および北海道の住民のことであります。この段階でも蝦夷という語の政府の直接支配の外の住民という語義は失われてはいませんが、異文化の担い手である北方の人々という側面がより強く出てくることになります。そしてこの段階の最後に近いころに「蝦夷」の読みが「エミシ」から「エゾ」に変化するのです。やがて「エゾ」は北海道の住民をさす語として定着しますが、初期の「エゾ」には東北北部の住民をも含んでいたようです。

第五段階は平泉藤原氏の時代の後半過ぎから鎌倉時代以後です。平泉藤原氏の時代の後半過ぎには本州の北端近くまでの地域に郡が置かれ、政府が直接支配する領域の拡大が行なわれました。そして鎌倉幕府が成立するとこの体制はさらに強固なものとなり、本州の北端部は北条氏の把握するところとなりました。そしてこの段階になると、政府の直接支配の外の地域は北海道だけになったのです。こうして政府の直接支配の外の住民、すなわち蝦夷として残ったのは北海道の住民ということになりました。そして津軽海峡より北の蝦夷は、やがてアイヌ民族を形成することになるのであります。

## 7　おわりに

以上、蝦夷アイヌ説と蝦夷日本人説の論拠を検討し、ついで北日本各地域の古代文化の変遷と「エミシ」「エゾ」という語の意味や主としてどの地域の人々が「エミシ」「エゾ」と呼ばれたのかをお話しいたしました。

このようなお話を通して、北日本各地の縄文人の子孫は、それぞれの地域の状況に応じてさまざまな道をたどったことがおわかりいただけたと思います。北海道縄文人の子孫はアイヌ民族を形成することになり、東北地方南部縄文人の子孫はかなりに早い時期に日本民族の一員となりました。一方、東北地方北部縄文人の子孫は北海道でアイヌ民族を形成することになる人々と途中まではほぼ同じ道をたどったものの、最終的にはアイヌ民族となる道を阻まれて日本民族の一員となったのであります。そしてこのように見ることができるのであれば、蝦夷アイヌ説と蝦夷日本人説の対立は、二者択一の論理では解決がつかない問題であり、むしろ蝦夷はアイヌであるか日本人であるかという問題のたて方そのものが、実はあまり意味が無かったということにもなるでありましょう。

これまでは、ややもすると日本人もアイヌも、超歴史的な存在であると考えられることが多く、日本民族なりアイヌ民族なりが歴史の展開のなかで成立するという視点はほとんど見られませんでした。蝦夷アイヌ説も蝦夷日本人説も日本人もアイヌも超歴史的に存在したことを前提にした考え方であったといえましょう。視点を転換させることで、今回お話したような新しい見方が可能になったのであります。

なお古代の蝦夷とアイヌの関係を今回お話したように理解するならば、蝦夷社会についてもアイヌ社会についても、研究を一歩前進させることが可能になると思いますが、今回の私の話はここまでとさせていただきます。

**追　記**

今回の私の話は、下記の拙著で述べたことの骨子であります。くわしくはそれらをご覧ください。

『古代蝦夷』吉川弘文館、2000,9
『古代蝦夷の英雄時代』新日本新書、2000,11
『蝦夷の日本史』平凡社新書、2001,1